

大阪芸術大学図書館所蔵 大坂画壇の画家の作品について

田中敏雄

江戸時代に三都といわれた江戸・京都・大坂にはそれぞれ江戸画壇・京都画壇・大坂画壇という画家たちの社会があった。江戸画壇や京都画壇はメジャーであったが、大坂画壇はなじみ難いものであった。しかし、江戸時代の大坂は町人の都市として、又、各地方の大名の蔵屋敷があり、地方から多くの人が集っていて、町としての賑わいを見せ大坂画壇として特色ある活動があった。大坂画壇の画家たちは大坂で生まれた人もいれば、各地から大坂に来て、住居を構えて、大坂で活躍した人達もいる。大坂画壇の多くの画家は京都で画を学び来坂して活躍したので、京都画壇の影響を多く受けていた。江戸や京都の公武社会でのアカデミックさは大坂では認められず、町人社会の支持層による格式にこだわらない自由な発想や表現があったように思われる。狩野派や圓山派、四條派、南画、琳派などいろいろな画風をもった画家達が町人の支持を得て活躍した。

今回紹介する大坂画壇の画家の作品は大阪芸術大学図書館の所蔵である。図書館には本画の作品が少なく、粉本、習画帳、画稿など絵画を学習しようとする学生の参考になるものが多く所蔵されている。

一. 大岡春卜筆 1. 人物下絵画卷 2. 花鳥下絵画卷

この二つの画卷には奥書きがなく、又落隸・印章もない。「花鳥下絵画卷」の巻頭に「屏風十六雙地取三卷之内花鳥小圖雀叱法眼春卜公於樂山洞圖之」の墨書がある(図1)。それ

によって、この二つの画卷は大岡春卜が描いた十六双の屏風の地取(下絵)であることがわかる。初めは「山水」「人物」「花鳥」と三つの主題の下絵画卷が一具としてあったと思われるが、現在、本学図書館には「人物」「花鳥」の二巻だけ所蔵されている。

この下絵の筆者である大岡春卜(1680~1763)は大坂で生まれた。画の師については明らかでないが、大坂の文人である木村兼葎堂の『兼葎堂雜録』の「巽斎翁遺筆」に“我卿(郷)ノ大岡春卜狩野派ノ画ニ名アリ”と記されていて、兼葎堂の絵の師である大岡春卜について、狩野派の画家で大坂では有名であったことが知られる。大岡春卜は狩野派の画家であるとともに狂歌もよくしたし、朝鮮通信使で随行してきた画家とも面談して、絵画について議論している。狩野派の粹にとらわれずいろいろな絵画の画法も収得している。狩野派の画家は粉本(絵手本)で絵を学習するので、春卜は絵の手本となるべき画譜を多く出版し、絵画教育に啓蒙的であった。狩野派の画家は師の粉本から学んだ絵画を手本として残し、それを粉本として用いて弟子達に絵を教えた。図書館所蔵の春卜

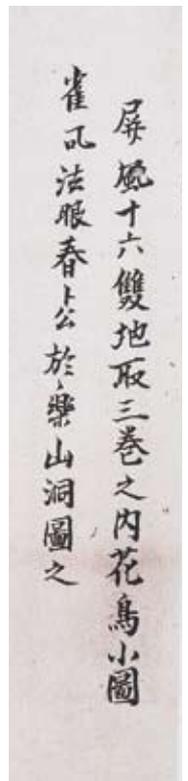


図1 墨書



図2 四愛図



図3 仙人図



図4 竹林七賢図



図5 虎溪三笑図

の屏風下絵も、狩野派では古くから描かれ、著名な屏風下絵は狩野元信筆とされる「花鳥図屏風下絵」が残されている。又、本学図書館にも狩野周信筆とされる「古永徳屏風下絵一卷」が所蔵されている。この他にも狩野派の粉本として「絵本・粉本巻」(紙本著色)、「狩野派画帖」(紙本淡彩)、「狩野派縮図帳」(紙本著色)、「画手本」(紙本墨画著色)などが図書館に所蔵されている。

1. 人物下絵画卷 一卷(紙本著色 41.1×1163.7cm)

この画卷は故事に登場する唐人物を描いたものである。その内容は①四愛図(図2)、②琴棋書画図、③仙人図(李八百・洪志・麻姑・梅福)(図3)④仙人図(劉女・趙丙・黃初平・馬師皇)⑤竹林七賢図(図4)⑥騎驢人物図⑦剡溪訪戴図⑧許由巢父図⑨虎溪三笑図(図5)⑩故事人物図、以上が屏風の下絵の画題である。それに続いて、屏風の下絵でなく単独の画題として、「韓信図」が付いている。この唐人物の10図の屏風下絵の各々の図には屏風の一扇一扇の区切りの墨線はみられない。又、画題ごとに紙継ぎがなされているので、各々図は六曲一隻の屏風に相当するものと思う。

2. 花鳥図下絵画卷 一卷(紙本墨画着色 41.5×1046.4cm)

この画卷は四季の花鳥を主題とする。①梅に白鷗図(春)、②鶴に楓・秋草図(秋)(図6)、③桜・雉子・菖蒲図(春・夏)(図7)、④雪・柳・錦鶏鳥図(冬)(図8)⑤葦・鷺図(夏)、⑥芦雁図(秋)、⑦松に八々鳥図(図9)、⑧竹雀図、⑨月に秋草図(秋)、⑩波に旭日図、である。これらの図も六曲屏風の一扇一扇の墨線はないが、一画題が紙継によって独立している。「人物図」と「花鳥図」のこれらの二つの画卷は屏風下絵という本画屏風制作の前段階のものとして描かれたが、描かれたこれらの画卷を見ると花鳥や人物や岩などの書き方は地取(下絵)というより完成に近いものとして描かれ、何か、ミニチュアの屏風の鑑賞性の高いものになっているように思われる。



図6 鶴に楓・秋草図



図7 桜・雉子・菖蒲図



図8 雪・柳・錦鶏鳥図



図9 松に八々鳥図

二. 浜田杏堂筆 画手本 一帖 (紙本墨画 27.0×13.0cm)

本画帖の紺色の布表紙の題箋に少し読み難いが「杏堂濱
先生□□法」とあることにより浜田杏堂が描いたことがわか
る。

浜田杏堂(1766～1814)は本姓は名和、幼少の頃に大坂
の医者 of 浜田家の養子となる。浜田家の医業を嗣ぐとともに、
大坂の文人画家福原五岳について画を学ぶとともに、中国絵
画も学ぶ。医者 of 傍ら文人として絵画のみならず詩文や書も
よくした。医者としてより画家として著名であった。名は世憲、
字は子微、号は杏堂、希庵、痴仙。

文人画の揺籃期の画家である柳沢淇園(1706～1758)が
『ひとりね』という随筆で、“先、繪もから繪より学ぶべし。繪を
かく人の常に見るべきは芥子園傳也”と述べられ、画家が絵を
学ぶには『芥子園画伝』という中国の画技法を記した画譜を
学びなさいと言っている。この浜田杏堂の「画手本」は『芥子
園画伝』からの引用を主としている。この画帖は見開きを一
つの単位として画面構成されている。

第一図は「畫石起手法」の文字と五つの石が描かれて
いる(図10)。これは『芥子園画伝』(以後「画伝」と記す)の初
集巻三の「石譜」の最初のところからの引用である。第二図

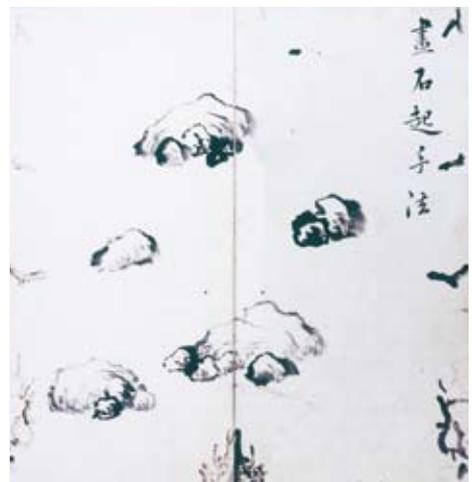


図10 畫石起手法

は「畫坡法」と書かれ、『画伝』の「石譜」には同じ図はないが、「畫石間坡法」を基に石の坡(つつみ)の画法を示す。第三図は「倪雲林石法」とあり、『画伝』の「石譜」の「雲林石法」に同図はないが、それに倣い、倪雲林の画法をもとに描いている。第四図には「畫巒頭法」と書され、『画伝』の「石譜」には“巒頭法”として“平遠巒頭法”や“諸家巒頭分図”というのが描かれているが、『画伝』の「畫山起手法」の最初に描かれている山の図が本図に似ている。第五図は「同上 不熟此法不能作山水坡列數法」と書かれ、“巒頭図”の一種であるが、『画伝』にはこの図の説明にあるような図は記載されていない。第六図には「同上 用挿石法」と書かれている。“巒頭法”の一種であるが、挿石法は『画伝』では見あたらないが、“黄戴石挿坡法”の図様は記載されているが本図とは異なる。第七図には「寘主朝揖法」と書かれている(図11)。『画伝』の「石譜」には“寘主朝揖法”は記載されていて、本図とよく似た図様が描かれている。第八図には「米家畫山法」と書かれている。『画伝』に描かれている“諸家巒頭分図”の「米芾」「米友仁」の巒頭画法を示す。本図は米芾のはじめた米点画法の画山法で描かれてはいるが、同じ図は『画伝』にはない。江戸時代の文人画家もよく米点画法を用いた「米法山水図」をよく描いている。第九図は「同上」と書かれ、米点画法を用いた巒頭図が描かれていて、この図も『画伝』には見ら

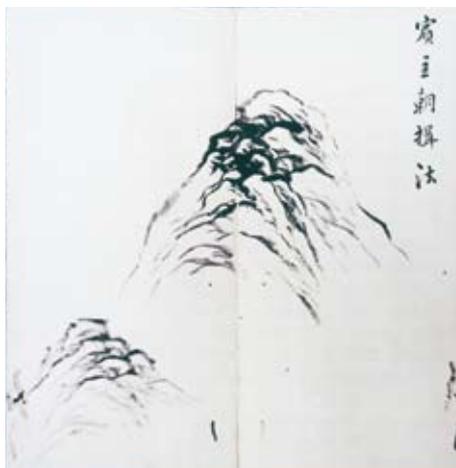


図11 寘主朝揖法

れず、浜田杏堂の米法の巒頭図である。第十図には「画樹起手法」と書かれている。葉を付けない樹木が二本描かれている。これは『画伝』の「樹譜」の“畫樹起手四岐法”にあたる。第十一図には「畫枯樹法」と書かれていて、二本の樹木が描かれているが、『画伝』にはこの画法がなく、『画伝』に基づく杏堂の創作ではないかと思われる。第十二図には「點葉法」と書かれ、“个字”“胡椒點雙鉤”“个字點雙鉤”“胡椒”“介字點”の五種類の點葉法が描かれている(図12)。『画伝』の「樹譜」には“介字點”“个字點”“胡椒點”“个字間雙鉤點”の四種が本画帖に認められるが細部の図様は異なる。第十三図には“雜樹法”“倒樹法”“菊花點”“雨雪點”“根下小樹法”の五つの画法が描かれている。この画面には點葉法と畫樹起手法を混合して描いている。この五つの内“菊花點”と“根下小樹法”は『画伝』にも記載されている。第十四図には「画茅屋草亭法」とあり、茅屋にはそれぞれ画法名が書かれていない四つの茅屋草亭が描かれている。『画伝』の「房屋譜」の“茅屋両間平置法”と“茅屋一間畫法”と同じ図様のものが、杏堂の画帖にある。後の二つの四阿は『画伝』に見あたらない(図13)。第十五図も茅屋と橋梁が描かれているが墨書はない。それらは『画伝』の「房屋譜」と「橋梁譜」にならったものであるが同図は『画伝』にはない。第十六図には樹木に囲まれた鐘楼と思われる高層の建物と帆船と舟が



図12 點葉法



図13 画茅屋草亭法

描かれているが墨書はない。『画伝』の“亭臺楼阁譜”と“舟船譜”を意識して杏堂が自身の創作で描いたのではないか。

本画帖は『芥子園画伝』の画法に基とづく画帖であるが、浜田杏堂の創意も入れて構成された習画帖である。弟子に与えたものであろう。見開き二つ目に「水竹斎清玩」の印があり、最後の見開きには「淡海國神崎郡 市田宇斯 所蔵」の墨書がある。

三. 長山孔寅筆 画手本 一帖 (紙本淡彩墨画 23.4×16.6cm)

表紙に「長山孔寅筆 画手本」と墨書あり、長山孔寅の画帖であることがわかる。長山孔寅(1765～1849)は秋田の人で、若い時に京都に出て、四條派の祖の吳春について絵を学ぶ。後に大坂に出て、大坂で居を構え、四條派の絵画を大坂で広めた。又、絵画だけでなく、三条茂佐彦の名で狂歌もよくした。狂歌本の挿絵も多く描いている。本帖は基本的には見開きに一主題づつ描かれている。①朝顔図(墨画)②萩図(墨画)③蘇鉄図(墨画)④葡萄図(墨画)⑤牡丹図(墨画)⑥躑躅図(墨画)⑦梅図(墨画)⑧木蓮図(墨画)⑨綿図(墨画)⑩独活図(墨画)⑪蚊帳吊草(墨画)⑫栗図(淡彩)(図

14) ⑬桔梗図(淡彩)⑭桃園(淡彩)⑮薔薇図(淡彩)⑯桜図(淡彩)⑰さるとりいばら図(淡彩)⑱烏瓜図(淡彩)⑲山水図・小禽図(淡彩)⑳海浜図(淡彩)(図15)㉑海図(淡彩)㉒茅屋図(淡彩)㉓人物図(淡彩)(図16)㉔人物・鶯鳥図(淡



図14 栗図



図15 海浜図



図16 人物図



図17 文人図



図18 白蔵主図

彩) ②⑤植松図(淡彩) ②⑥文人図(淡彩)(図17)「政辰之夏
孔寅寫」の墨書あり ②⑦兜図(墨画) ②⑧田舎屋図(墨画) ②⑨毛
箒・鑲図(墨画) ③⑩鶴図(墨画) ③⑪牛図(墨画) ③⑫白蔵主図(淡
彩)(図18) ③⑬撫子図(墨画) ③⑭萩・小禽図(淡彩) ③⑮蓮華草
図(墨画) ③⑯鯉図(墨画) ③⑰花卉図(淡彩) ③⑱蟹図(墨画) ③⑲
菊図(淡彩) ④⑰蕨図(淡彩)「貫山蔵」の墨書 ④⑱扇面牛図(墨
画)「貫山蔵」の墨書 ④⑲扇面鹿図(墨画) 以上本帖は42図で
成立している。そのうちの②⑥の「文人図」には「政辰之夏
孔寅寫」の墨書があり、多分、「文政辰」であるから文政三年
(1820)に描かれたのではないかと思う。この画帖の絵の成
立もこの頃かと思う。文政三年は孔寅が56才の時である。
花卉図には四條派の没骨による柔らかな表現が見られるが
「牡丹図」「栗図」は鉤勒法による輪郭線の明確な画法も
見られ、多様さをみせる。人物の顔は吳春から受け継いだ孔

寅の他の作品の人物図によく見られる面長で、表情のある起伏に富んだ顔立ちの表現が見てとれる。

五. 金子雪操筆 1. 山水画帖 2. 山水画帖

この二つの山水画帖は表紙と裏表紙は折板で装幀されている。

1. 金子雪操筆 山水画帖 一帖(紙本墨画淡彩 31.3×14.6cm)

本画帖の折板の表紙に「雪操翁山水図」の墨書がある。そして、見開き一図ずつに山水図が描かれている。その各図には「雪操」の白文方印が押されている(図19)。それにより、この山水画帖は金子雪操が描いたことがわかる。金子雪



図19 「雪操」印



図20 山水画帖の内

操(1794～1857)は江戸で生まれ、増山雪斎や釧雲泉に画を学び、金沢・京都を経て、大坂に来て居を構える。一時、大坂近郊の吹田に住む。名は大美、字は不言、孟玉、号は雪操、各半道人、有情痴者、塵海漁者、美翁、翠陀小隠。

本画帖には見開きに一図の山水画が描かれ、全てで九図ある。米法山水図を含めて、多様な画法の山水図が描かれている(図20)(図21)(図22)(図23)。文人画家の画様の広さを知ることができる。画帖の終りの方に「壬寅春仲寫於雪操庵南画□蘭□□之處 金不言 「雪操」(白文方印)「各半」(朱文方印)」とある。壬寅春仲は天保十三年(1842)二月に描かれたことがわかる。雪操は天保八年(1837)～弘化二年(1845)頃まで吹田に住んでいたの、吹田での制作ではないかと思う。最後の見開きの頁に「此画冊子雪操翁所図也浪花某所藏携来示余余未得翁之画因強而請之翁翁終許之園物之害于物真甚於水火□外有二紙應需呈宇田國主愛翫因証□」の墨書がある。

2. 金子雪操筆 山水画帖 一帖(紙本墨画淡彩 27.5×19.4cm)

この画帖の折板の表紙には付箋はあるが、題は書かれていない。この画帖には筆者を金子雪操だと明らかにするものは何もない。1の金子節操の山水画帖と一具のものとして、図書館の所蔵となった。この山水画帖は見開きで一図でなく、片側に一つの山水図が描かれ、全てで九図あるが、前七図は墨画で、後二図が淡彩である(図24)(図25)(図26)。本画帖の筆者



図21 山水画帖の内



図24 山水画帖の内



図22 山水画帖の内



図25 山水画帖の内



図23 山水画帖の内



図26 山水画帖の内

については1の金子雪操の山水図に似た画法や雰囲気を感じられるが、もう少し筆者について検討を試みてみたいと思う。

六. 岡田半江筆 山水画卷 一卷

(紙本淡彩 28.5×635.8cm) (図27、図28、図29)

本画卷の巻末に“天保亥重陽前五日 墨江儒寓 半江田肅 「肅字子羽」「半江」(白文方印)”とある(図30)。これによって、岡田半江が天保十年(1839)九月四日に住之江

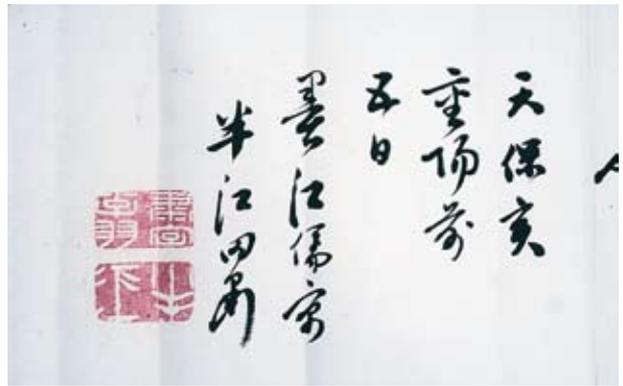


図30



図27 岡田半江筆 山水画卷



図28 岡田半江筆 山水画卷



図29 岡田半江筆 山水画卷

で描いたことがわかる。岡田半江(1781~1846)は大坂の著名な文人画家の岡田米山人の子として大坂で生まれたとされる。幼少時から父に絵の手解きを受ける。その後、藤堂藩大坂蔵屋敷に仕える。父の没後は家業の米屋を継ぐが、早く子息に譲り、藤堂藩も致仕し、文人的隠遁生活に入る。天満に住んでいたが、天保八年(1837)の大塩平八郎の乱後、住居を住吉浜に移す。

この山水画卷の巻頭の題字は“上和下睦 菘翁書「摘菘老圃」「君茂」(印)”とある。貫名海屋のものである。山水図は中央に広く流れを作り、川下から川下へとだんだんと広がって終りの方は広い空間を作っている。この画卷の上方に半江の賛がある。“**喜**城藍園先生浮舟延予於 墨江豊年橋邊飲有詩次韻製画并題以**罍**洲 凡鳥偶栖宿**口**無題写**旁**情**罍** 著海館**口**輕於毛風節蘆聲靜潮來港水寫停舟 晚照**口**寫景分夏**口** 夏山雲**口**帶綠樹雨後新一夜潺湲水邨橋自蒙人”とある。この画卷は岡田半江が交流のあった宮村藍園とともに住之江の豊年橋辺で酒を飲み、詩を読んで遊んだ時のものようである。この時は半江は大塩平八郎の乱後に住吉浜に住んでいた頃の作品である。

七. 深田直城 運筆習画帳 一帖 (紙本淡彩 26.9×15.6cm)

本画帖は見開きを一画面とし、各画面に「直」「城」の印があり(図31)、深田直城の作品であることがわかる。深田直城(1861~1947)は滋賀県の膳所で生まれ、四條派の森川曾文に絵を学ぶ。後に大坂に移住し、後進の指導にあたる。晩年は西宮に住まいする。



図31

本画帖は見開き一面に一つの主題を描く。

- ①木蓮図(墨画)②漁夫図(墨画)(図32)③鶴図(淡彩)
④藤・雀図(墨画)⑤筍図(墨画)⑥躑躅図(淡彩)⑦菖蒲図

- (墨画)⑧田植図(淡彩)(図33)⑨果物図(墨画)⑩朝顔図(淡彩)
⑪玉蜀黍図(淡彩)⑫クワイ図(淡彩)⑬蓮図(墨画)
⑭蹴鞠図(墨画)⑮七夕図(淡彩)(図34)⑯エンドウ図(墨



図32 漁夫図



図33 田植図



図34 七夕図

画)⑰芙蓉図(墨画)⑱葛図(墨画)⑲白蔵主図(墨画)⑳葡萄
 図(墨画)㉑砧図(淡彩)㉒花卉図(淡彩)㉓柿図(淡彩)
 ㉔雀に稲穂図(墨画)㉕山茶花園(墨画)。以上、二十五図
 を夏から秋にかけての花木と季節に関わる人物を描いてい
 る。本画帖のそれぞれの一図だけでは本画になり難く、いろ
 いろな季節のものを描く運筆の手習いの為のものである。春・
 冬の画帖もあったかも知れない。本画帖の最後の見開きに
 「賀正 戊辰歳旦 深田直城」と自筆と思われる墨書の紙
 が貼られている。因に、戊辰は昭和三年(1928)で、本画帖の
 成立もこの頃ではないかと思う。

八. 菅 楯彦筆 画稿 十八枚

菅 楯彦(1878～1963)は鳥取に生まれる。父は日本画
 家の菅盛南で、幼時の時に大阪に移り住む。独学で狩野派
 や土佐派や円山四條派などを学び、幅広い画風を身に付け
 る。又、国学や漢学等の学問の世界も幅広く学ぶ。雅楽に
 ついても造詣深く、四天王寺舞楽協会会長も勤めた。

- ①住吉祭礼図 一枚 紙本淡彩 42.7×118.3cm
 「楯彦 印」(図35)
 ②太閤図 一枚 紙本淡彩 118.6×45.3cm

「楯彦 印」(図36)

- ③七福神図 一枚 紙本淡彩 118.0×46.5cm
 「大正四年九月 □□の寫」
 ④舞楽図 一枚 紙本淡彩 119.0×39.3cm
 「大正六年六月二十九日阿喜男」 「菅原楯彦 印」
 ⑤舞楽図 一枚 紙本淡彩 79.2×43.0cm 「楯彦 印」
 ⑥舞楽図 一枚 紙本淡彩 43.0×79.2cm 「楯彦 印」
 ⑦大国主命と白兔図 一枚 紙本淡彩 118.6×37.1cm
 「大正五年十月卅日」 「菅原朝臣楯彦 印」
 ⑧三歌仙図 一枚 紙本淡彩 118.7×24.0cm
 「大正六年四月二十八日」 「楯彦 印」
 ⑨柿本人麻呂図 一枚 紙本淡彩 117.5×49.7cm
 「菅原朝臣楯彦 印」
 ⑩六歌仙図 一枚 紙本淡彩 118.1×42.5cm
 「楯彦 印」
 ⑪大津絵図 一枚 紙本淡彩 133.6×37.2cm (図37)
 ⑫南蛮人図 一枚 紙本淡彩 132.6×32.8cm
 「楯彦 印」(図38)
 ⑬住吉祭礼図 一枚 紙本淡彩 117.5×34.2cm
 「乙卯夏日 楯彦 印」
 ⑭大国主 一枚 紙本淡彩 132.4×43.8cm
 「菅原楯彦 印」
 ⑮十六羅漢図 一枚 紙本淡彩 134.8×42.7cm



図35 住吉祭礼図

「楯彦 印」

⑯草履達磨 一枚 紙本淡彩 117.9×46.7cm

「大正乙卯冬十二月 楯彦画 印」

⑰官人図 一枚 紙本淡彩 128.4×45.4cm

「菅原楯彦 印」

⑱寒山拾得図 一枚 紙本淡彩 119.0×46.5cm

この画稿には年紀のあるものがあり、それによると、大正四年(1915)～大正六年(1917)の間の年紀がみられ、これらの十八枚の画稿はその頃に描かれたのであろう。そして、画稿の中には朱書や墨書の書き込みもあり(色の指定など)、本画制作の過程を知ることができる。菅楯彦は画題も住吉踊図、寒山拾得図、三十六歌仙図、大国主命図、南蛮人図、大津絵図と中国絵画、風俗図、歴史画、大和絵等多様な画題を流麗な筆致で表現し、諸画法や学問、知識の多様な豊かさをもっていることを窺い知ることができる。

本稿は平成23年度塚本学院教育研究補助費による研究の成果です。

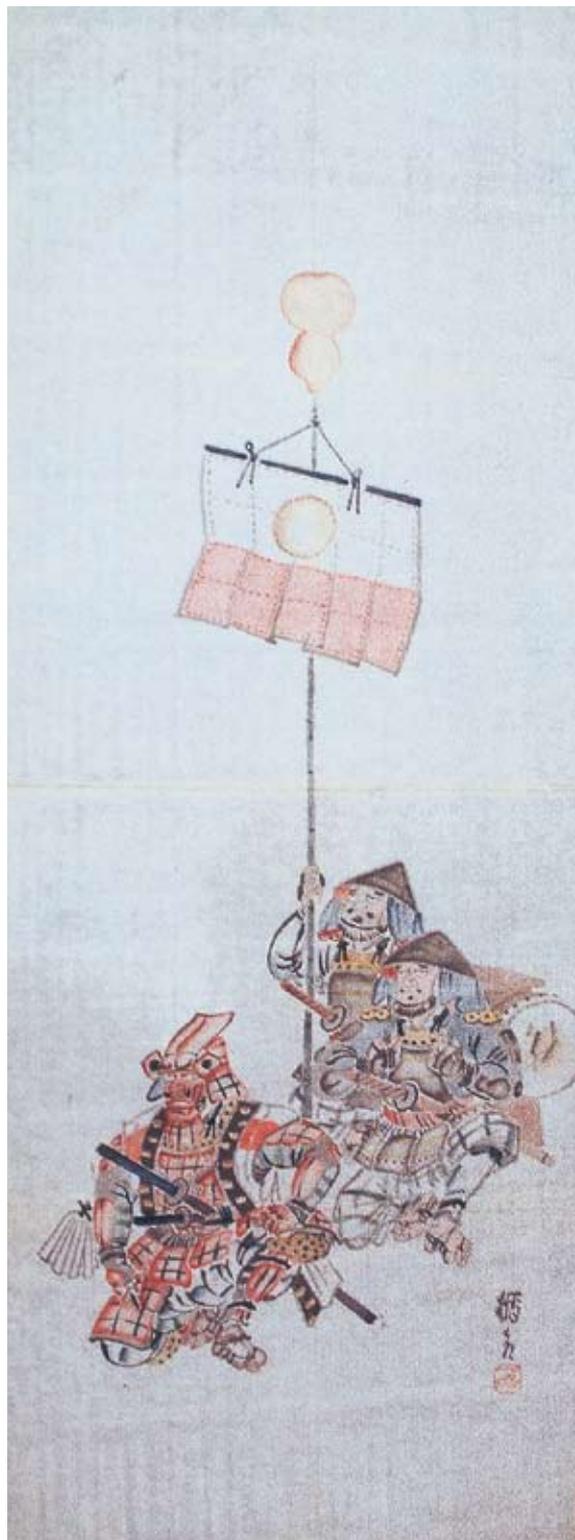


図36 太閤図



图37 大津絵図



图38 南蛮人図